古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 11 号（2003 年 10 月）

パスパ文字漢語表記から見た中期モンゴル語の音声

中村雅之

１．匣母を表すパスパ文字

パスパ文字漢語の声母はおおむね伝統的な三十六字母の枠組みに則って作られているが、匣母・影母・喩母の３字母に対してはそれぞれ２種の文字が配されている。影母と喩母については今回は論じない。問題とするのは匣母である。匣母に対するパスパ文字表記として、直音韻母と結合する場合には「γ (𰵀)」、拗音韻母と結合する場合には「h1(𰵁)」が用いられる。匣母は中古音（＝隋代の標準音）では有声の喉音摩擦音であったが、その後無声化したため、元代標準音においては曉母と同じく無声摩擦音であった(注 1)。ところが曉母が直拗を区別せず「h2(𰵂)」のみで表記されるにも関わらず、同じ音価を持つ匣母は２種のパスパ文字によって表記されている。この均整を欠く状況はいかにして生じたのであろうか。

以下に問題となる部分の言語と文字の対照表を掲げる。ここでは、各言語の音声は便宜上‘音素’として示されているが、これは当時の厳密な音声がいずれの言語においても細部において不明であり、IPA 表記できないため、暫定的に音素として提示したもので、音韻論的解釈を加えたものではない。例えばモンゴル語の/x/と/χ/は音韻論的には後続する母音によって相補分布をなすため、区別せずに/h/とすることが可能であるが、当時の話者がおそらく別の音声と認識していたであろうと見なして別立てにしてある。破裂音の/k/と/q/（および/g/と/G/）も同様。

チベット語の音素 チベット文字表記	/h/ h(𰵁)	/k‘/ /g/ k‘(𰵄) g(𰵅)	
中期モンゴル語の音素 ウイグル文字表記 パスパ文字表記 秘史漢字音訳(-a/-e)	/x/ /χ/ (無表記) h1(𰵁) 赫 哈	/k/ /g/ K(k/g) k‘(𰵄) g(𰵅) 客 格	/q/ /G/ X(q/γ) q(𰵀) 中合
元代漢語の音素 三十六字母 パスパ文字表記	/h/ 曉母 h2(𰵂) 匣母 h1(𰵁) γ (𰵀)	/k‘/ /k/ 溪母 見母 k‘(𰵄) g(𰵅)	

２．パスパ文字漢語の性格

ある言語に文字が与えられる時、その文字が必ずしも当該言語の話者によって作成されるとは限らない。

パスパ文字モンゴル語においては、無声と有声という観点からは/k/と/g/は区別されるが/q/と/G/は区別されない。一方、調音点の前・後という観点からは/k/と/q/、ならびに/g/と/G/は区別されるが、/x/と/χ/は区別されない。これらの不整合は、この文字の作成者パスパがチベット語話者であることに

よって生じたものと考えられる。(注 2)

パスパ文字漢語にも同様の問題がある。匣母においてわざわざ２種のパスパ文字を作成しているのは、漢語を表すパスパ文字がチベット僧パスパによってではなくモンゴル語の話者によって作成されたことを物語るであろう。中国人は伝統的に、喉音を調音点の前・後によって区別する習慣を持たなかった。チベット人も同様である。しかしそのような区別（/x/と/χ/）を持つモンゴル語話者によって匣母に対応するパスパ文字は作られたものと考えられる。つまり漢語話者にとっては一つの音素/h/の異音である[x]と[χ]が、モンゴル語話者にとっては明確に別の音として認識されたのである。また、滂母を表すパスパ文字「p‘(ꡐ)」は「b(ꡐ)」をわずかに変形させて作られている。その字形の差異はあまりにもわずかであり、実際にはこれを区別しない資料の方が多い。チベット文字の中にp‘の文字があるにもかかわらず、それを利用せずに「b(ꡐ)」と酷似した字形になったのは、パスパ文字漢語表記がチベット人によって作られなかったことを示すと同時に、音素として/p‘/を持たないモンゴル語話者が作成に関わったことを如実に示している。

つまり、一見奇妙なことではあるが、パスパ文字モンゴル語の表記にはチベット語話者の音声認識が反映し、パスパ文字漢語の表記にはモンゴル語話者の音声認識が反映しているのである。そのため、中期モンゴル語の無声摩擦音/x/と/χ/は、中期モンゴル語の表記においてはいかなる文字によっても明確に区別されないにもかかわらず、意外にもパスパ文字漢語表記の中にその区別が見出されるという結果が生じてしまった。したがって、パスパ文字漢語表記は単に元代漢語音を知る資料としてだけではなく、間接的に中期モンゴル語の音声に関する情報を含むという性格を有していることになる。

３．軟口蓋音/x/と口蓋垂音/χ/

中期モンゴル語の語頭のｈ（パスパ文字 h1(ꡖ)で表記されるもの）を本稿では/x/と/χ/という二つの音素として扱ってきた。つまり中期モンゴル語のｈは具体的には軟口蓋摩擦音と口蓋垂摩擦音であると想定したわけである。これを漢語とモンゴル語のそれぞれの話者の意識からとらえるならば、以下のようになる。

	(漢語)	(モンゴル語)	
モンゴル語話者の音声認識	/x/　/χ/	/x/　/χ/	/q/　/G/
漢語話者の音声認識	/h/	/h/	準/h/

このモデルがパスパ文字表記および漢字音訳の状況を最もよく説明できると考えるが、別の想定として、中期モンゴル語のｈを声門摩擦音と仮定することは理論上可能であろうか。つまり、語頭のｈは音声としては[h]であり、モンゴル人の意識としてもただ一つの音素/h/であったと。その場合、次のようなモデルになる。

	(漢語)	(モンゴル語)	
モンゴル語話者の音声認識	/h/	/h/	/q/　/G/
漢語話者の音声認識	/h/	/h/	準/h/

13 世紀のモンゴル語も漢語も共にただ一つの音素/h/を持っていたのであれば、わざわざ匣母のために第２のパスパ文字 γ(ꡘ)を作る必要はないように思われる。あるいはモンゴル語話者が漢語を耳にした

時に、漢語の音声が後続韻母によって[x]と[χ]の二つの音声として聞こえたのであろうか。しかし、モンゴル語話者が音素としてただ１種の/h/しか認識できないわけであるから、他言語の[x]と[χ]を聞き分ける可能性はほとんどないと言える。それはあたかも日本人が他言語の中に存する一つの音素の異音[x]と[χ]を区別すべき音として認識するようなものであろうから。

このように考えると、やはり中期モンゴル語にはその話者自身が二つの別の音と認識した/x/と/χ/があったと仮定する最初のモデルの方がより合理的である。そうであるからこそ漢語話者が一つの音と認識した/h/を２種に区別できたのであろうし、区別せずにはいられなかったのであろう。

ところで中期モンゴル語の体系の中に区別すべき/x/と/χ/が存在したとするならば、論理的帰結として、/q/は摩擦音ではなく破裂音であったということになる。/q/と/G/は現代の主要方言では、前者が無声の口蓋垂摩擦音、後者が有声の口蓋垂破裂音である。この状況は清代の満洲文字モンゴル語およびハングル文字モンゴル語においても変わらない。さらに明代の韃靼館訳語（乙種）においても/q/が摩擦音であった形跡が見て取れる（cf.吉池孝一「韃靼館雑字の h-について」『KOTONOHA』第 7 号、2003）。そこで 13 世紀においては/q/がはたして破裂音と摩擦音のいずれであったのかということが問題となる。しかし、本稿で仮定したように、体系の中に別の/x/と/χ/という音素が存在していたとすれば、/q/は破裂音であったと考えざるを得ないのである。

４．文字生成における‘二次変形忌避’の原則

匣母にはモンゴル語話者の音声認識が投影されて、h1(ꡖ)と γ(ꡗ)という二つのパスパ文字が作られたが、曉母には h1 の変形である h2(ꡘ)しか作られなかった。匣母と曉母がどちらも同じ音価を有するにもかかわらず、なぜ曉母は直音と拗音で区別されなかったのであろうか。具体的に言えば、γ を変形した γ2 はなぜ作られなかったのか。

それは、一般的に文字生成においては‘二次変形忌避’の原則とでも呼ぶべきものがあるからだと考える。つまり、何らかの理由で新たな表記を考案する時、既存の文字に少し変形を加えて作り出すのが普通である。h1(ꡖ)から h2 (ꡘ)が作られるように。ところが新たに作られた文字を利用してさらに別の文字を作り出すことは忌避されるようである。つまり、文字の変形は１回しか行なわれない。２回目の変形は避けられる。これを仮に「二次変形忌避の原則」と呼ぶことにする。

パスパ文字の作成においては、この二次変形忌避の原則が実に厳しく働いている。チベット人はチベット語に存在しないモンゴル語の音素/q/と/G/を表すために、「・(ꡊ)」を変形させて「q(ꡋ)」を作ったが、さらに二次変形を行なって/q/と/G/を区別することはしなかった。

一方、漢語の/h/をモンゴル語の/x/と/χ/に見立てて区別しようとしたモンゴル人は、まず匣母においては、/x/に対して既存の文字「h1(ꡖ)」を配し、次に/χ/に対しては調音点を同じくする「q(ꡋ)」（←モンゴル人にとっては既存の文字）を変形させて「γ(ꡗ)」を作った。曉母においては「h1(ꡖ)」をもとに「h2(ꡘ)」を作ってこれを充てたが、それ以上の文字を作り出すと二次変形せざるを得なくなるため、２種の文字を作ることができず、結果として、匣母には「h1(ꡖ)」と「γ(ꡗ)」の２種、そして曉母には「h2(ꡘ)」のみという非常にバランスの悪い配置になった。

これらを一般化すると、既存の文字「A1」「B1」等に何らかの変形を加えて新たな表記である「A2」「B2」を作り出すことはあっても、さらなる変形によって「A3」「B3」を作ることは原則として行なわれない、ということである。

新たな表記がどのようにして生まれるのかを考える時、パスパ文字は恰好の研究材料となる。チベット

文字からパスパ文字モンゴル語表記が生まれ、さらにそこからパスパ文字漢語表記が生まれるという文字体系の発展過程の中に、文字生成の一般的なメカニズムを見ることができるのである。

（注 1）元代の漢語において、いわゆる濁音（ないし全濁音）声母が無声音であったことは次の２点から確認できる。

(a)禅母が「š1(𰋀)」で表記されること。

(b)漢字音訳で平声全濁音が全てモンゴル語の無声音に対応していること。

まず(a)について。モンゴル語の無声の/ʃ/を表す文字が「š1(𰋀)」であるが、漢語の表記においてはそれが審母ではなく禅母に用いられている。これは禅母が無声であったと考えて初めて了解される。禅母がもし有声であったならば、「š1(𰋀)」は審母にこそふさわしいはずである。ほかにモンゴル語の/x/～/χ/を表す「h1(𰋁)」が曉母ではなく匣母に用いられているのも匣母が無声音であった証左である。

次に(b)について。漢字音訳では一般に無声有気音がモンゴル語の無声音に対応し、無声無気音がモンゴル語の有声音に対応する。平声全濁音は無声化に際しては有気音になるため、モンゴル語の無声音に対応しているのである。

（注 2）パスパ文字以前にモンゴル語を表記していたものとしてウイグル文字がある。このウイグル文字モンゴル語の表記には、ウイグル語話者の音声認識が反映している。その最たるものは語頭のｈ（本稿の表記では/x/～/χ/）が全く表記されないことである。13 世紀のウイグル語にはおそらく音素としてｈが存在しなかったために、モンゴル語表記においては無視されたのであろう。また、漢字音訳によるモンゴル語表記には漢語話者の音声認識が反映しているため、/q/と/G/のような漢語に存在しない音素は区別されていない。要するに中期モンゴル語を表記した３種の文字（ウイグル文字、パスパ文字、漢字音訳）は、いずれもモンゴル語の表記を目指したものでありながら、どれ一つとしてモンゴル人自らの音声認識に忠実には作られなかったことになる。